

2024年度国際日本学コンソーシアム【報告要旨】

中世文学における『老子』の引用

台湾大学日本語文学科

曹景恵

本発表は、鎌倉期の文学作品における『老子』の引用に焦点を当て、その実態を考察することによって、中世文学における漢籍の役割を考えるものである。

東アジアでは古来、漢字、漢籍を共通の知的基盤として、それぞれの文化が多様に発展してきた。前近代の日本文学作品を紐解くと、漢籍よりの引用が頻繁にみられる。また、漢籍の記事を下敷きにした文学作品の創作手法も一般的であった。漢籍は日本文学の生成に大きな影響を与えていたことがすでに先行研究によって指摘されている。

しかしながら、その一方、中世期の文学作品を読むと、漢籍より引用する際、書名を明記する場合もあれば、典拠をぼかしたり隠したりすることも少なくな。本発表では、中世の随筆文学『徒然草』、世俗説話集『十訓抄』、仏教説話集『沙石集』『雑談集』、中世前期神道撰述書『天地靈覚秘書』など、多岐にわたるジャンルの文学作品や文献テキストを取り上げ、個別のテキストにおける『老子』の受容の様相を考察し、書名を明記した引用と書名を隠した引用との視座から、『老子』引用の効果や作者の意図を探り、中世における『老子』受容のありかたについて明らかにしたい。